

意見陳述書

1 私、山田佳史は、1998年8月から四日市郵便局郵便課で非常勤職員を勤め、2000年9月実施の国家公務員第3種試験（郵政事務B・東海地区）に合格、採用通知を受けました。2001年4月1日付で伊豆高原郵便局に常勤職員として着任しました。

試験を受けたきっかけは、非常勤職員として約2年8ヶ月四日市郵便局で勤めているうちに「自分にも（常勤職員が）勤まる」と思ったからでした。

2 ところが、伊豆高原郵便局に着任後、1年くらい経過した頃から、「ミスが多い」、「仕事が遅い」など、内務、外務を問わず他の職員ほぼ全員からの叱責が日に日に高まり、局長をはじめとする上司から、退職勧告や暴力などを受けるようになりました。それも日を迫うごとにエスカレートし、退職願の提出を強要されたり、毎日のように手足で殴られる、蹴られるなどの暴力を受けたりしました。

また、他の職員のミスであるにも関わらず、「間違いがないのが人間！！キサマしか考えられない！！」と言われたりしました。私が休みの日のことだったにもかかわらず、お金が合わないことを疑われお金を支払ったたこともあります。挙句の果てには「テロリスト」「鬼畜以下」「郵政民営化はオメーのせいだ」「死ぬ」「城ヶ崎の吊橋から飛び降りて自殺しろ」等々と言われ続けていました。また暴力を受け痛がっていると「演技しているだろ」等と言われたりしてきました。

病気で病院の診断書を提出しても全く信用して貰えず「サボっとるのだろ！！」「ズル休みしとったんだろ！！」等々と言われました。

そのようなことがあったため、体のあちこちが痛むのに我慢して、病院に行くことすら、ためらっておりました。また、給料日には「これが最後の給料明細だな」「給料泥棒」「給料返せ」「(職員全員に)焼肉奢れ」等と言われました。

また、指示された仕事を終えるまで深夜に及ぶことがほとんどで、次の出勤のときに「光熱費泥棒」「局の電気代払えるか」等々と電気のメーター票を見せ付けられて言われました。また、昼間指示された仕事でも終えるのが遅かったり、ミスがあったりすると、それがどんなに小さなミスでも「どれだけ人に迷惑をかけたら気が済むのだ！人が苦しむのを喜んで見ているのだろ！」等々と言われました。

2006年4月6日には局長代理の堤芳夫より「退職願を提出する迄は(家に)帰さない」と言われ、父に相談の電話を入れたこともありました。そのほか、妹の結婚式のために4か月前から計画年休として5日間の休暇を申請して受理され

ていたのに、直前になって「上司が休みを取るから有給休暇は与えられない」と言われ、当日と翌日の非番週休のみにされるなど、私に対する暴力や嫌がらせを一々挙げればきりがありません。

これらの暴力や言葉の数々は以前から伊豆高原郵便局のほとんど全職員から受けてきましたが、特に鈴木治人及び局長の村上互、局長代理の堤芳夫などの役職者・管理者からは強く受け続けてきました。職場の責任者が率先して職場ぐるみで私をいじめ続けていたと思っています。

- 3 東京の精神科に通院するようになり、「(注意欠陥多動性障害の特性を伴う)アスペルガー障害」と診断されましたが、併せて、毎日のように職場で受けてきた暴力・暴言等の嫌がらせによる合併症である抑鬱や不安障害を患い、2005年4月4日に精神障害3級の認定を受け、伊豆高原郵便局長に提出しました。

その後は、障害に配慮してもらえるところか、その認定に対して局長代理・吉田かよ子から「市役所を騙して取ったよ。コイツ!」とか「脱税のために取ったよ。コイツ!」と局内で言いふらしていました。また仕事に対して「病気のせいにするな!」「薬のせいにするな!」と言われたりしました。

「定期的な通院加療を要する」との診断書を提出したにも関わらず、通院のための休みを与えられないこともあり、私の障がいや病気を理解してもらえませんでした。

理解しようとする姿勢すら全く示してもらえませんでした。

- 1 職場でのいじめによる苦しみから逃れようと、年1回提出する「職務に関する希望調書」で繰り返し転勤を希望していましたが、局長からは「能力が低すぎて受け入れてくれる郵便局がない。転勤は局長同士の合意がないと成立しない。受け入れてくれる郵便局がないと成立しない」と言われ続けて転勤は認められないままでした。

- 5 2006年4月20日、私は鈴木治人から書留の仕事をしていた時に電話のミスを咎められバイク置き場に連れ出され正座させられた上4～5回程足蹴りにされました。何度も何度も謝り続けましたが聞き入れてくれませんでした。その鈴木治人からも、それ以前から、毎日のように暴力・暴言などの嫌がらせを受けてきました。傷害事件はその延長でした。

翌日の4月21日の勤務中、眩暈と腹痛、とりわけ蹴られた左脇腹の痛みが事件当夜より増して酷くなり、総務主任・横山和真に「お腹が痛くてたまらない!眩暈でクラクラする!頭も痛い!医者に行かせてください」と何度も何度も願ひ出しましたが、局長代理・堤芳夫より「オメー昨日いつまで仕事していた!」「キ

サマ演技しているだろ！医者には行かさん！自業自得だ！」と言われました。

それでも、午後、上司や他の職員の目に怯えながら伊東市大室高原8丁目の「メディカルはば伊豆高原」に行きました。その場で出された診断は「脾臓破裂」、すぐに大きな病院に救急車で行かなければいけないと言うことですのですぐに伊豆高原郵便局に電話しました。

対応したのは水田愛(めぐみ)という局員で「(この忙しいのに) 状況弁(わきま)えているのですか？」と言いながら局長代理・堤芳夫に電話が代わりはな、「キサマ傷害事件にする気か！傷害事件にするんじゃないぞ！」と言われました。程なくして局長・村上互がメディカルはば伊豆高原に来て対応しました。その後伊東市民病院に救急車で運ばれ、精密検査の結果やはり「脾臓損傷」「腹腔内出血」で入院2週間、全治3ヶ月と診断され3日間絶対安静・絶飲食で過ごしました。

2 その後精神的に不安定であることから2006年4月28日家族同伴で行くことを条件に外出許可を戴いて上京し、精神科の先生の診察を受け、今回の事件で「心的外傷後ストレス障害」との診断も受け、それにより持病の合併症である抑鬱や不安障害が悪化・進行しているとの診断を受けました。入院している間、郵便局の人たちが見舞いと称してやってきませんが、とにかく怖かったので郵便局関係者の見舞いを断りました。2006年5月8日に退院しましたが、警察の取調べや検察での事情聴取には緊張し、話が仕事や職場の話になってフラッシュバックに怯え、自分の持っている自虐的な性格から自分を責める事しか話すことができませんでした。

7 鈴木治人の刑事裁判で、情状証人となった、伊豆高原郵便局管理職の横山和真は、鈴木は暴力が、被害者である私のミスや、度重なる指導にもかかわらず、それを反省しない不遜(ふそん)な態度に誘発されたもので、やむを得なかった、「暴力はいけない」が、諸悪の根源は、指導を素直に受けなかった被害者の私にあるような言い方をし、被害者の私を悪者にしようとしたと、両親や弁護士から聞いています。

私は、注意欠陥多動性障害(ADHD)、アスペルガー障害という診断を受けています。私は診断書を提出してそのことを局長に報告しているのですら、少しでも私の障害に配慮しようという姿勢を示してくれたなら、一般向けの本を読むだけでも、脳の高次機能の障害により、自己表現が困難、他の人とのコミュニケーションの能力に障害あるのが、アスペルガー障害の特徴だということや、私がしかられているときに指サックをいじってしまったり、目つきが悪いという誤解を受ける様なことがらが、まさに私の障害が原因となっていたことを、簡単に理

解できたはずで、そういう努力をしようとしなくて、刑事裁判でも私をまるで悪者のようにしたことは、全く許せません。

8 その後私は、今日に至っても、実家で療養しておりますが、実家宛に郵便局や日本郵政公社東海支社から手紙や電話があったりすると背筋が凍り付きます。

また会話で仕事や職場の話題が出たり、新聞のテレビ・ラジオ欄に「伊豆高原」や「リゾート」の文字を見たり、テレビで伊豆高原のシーンや暴力・流血シーンを見たり、通院のために乗る電車の中で週刊誌の広告を見たりするとフラッシュバックが起こり、就寝中怖い夢を見て唸ったり大声を張り上げていることを親に指摘されることもあり、不安や恐怖に怯える日々を送っております。

障害のある私をこのような目に遭わせた郵便局の会社と責任者にはきちんと責任を取ってもらいたいと願います。私は、症状のため、裁判に出頭することもできませんので父に代読を依頼します。

2008年11月18日